

# 源順の対句的対称的構成の和歌（「対の歌」）の広がり

安部清哉

【要旨】 安部（2022）において、源順の和歌の詠歌様式として、「対句的和歌」を取り上げた。この様式は、漢詩の詩序における対句表現を模し、「歌の序」の中で韻数律（五七・七五）を踏まえた和歌的表現を対句構造に配置したことをその誕生の遡源とすることを、時系列的に示した。本稿では、そのような独特の詠歌技法において、紀貫之におけるいわゆる「本歌取り」の歌（額田王の歌による）の影響も受けていること、源順自身による『万葉集』の歌の翻案的作業（「万葉集に和す歌」の歌三首）とも関わることを指摘し、『新古今和歌集』以前におけるいわゆるプレ本歌取り期の歴史とも関わってくることを指摘する。

## 1 はじめに

前稿・安部（2022）（以下、「前稿」と呼ぶ場合もある）において、源順の和歌の詠歌様式として、元歌に対して語句や構成が対称的な「対句的和歌」（「対の歌」「対歌」なども略称）を取り上げた。

源順の対句的対称的構成の和歌（「対の歌」）の広がり（安部）

源順のいわゆる「歌の序」の中に、漢詩の詩序における対句表現を模して、韻数律（五七・七五）を踏まえた和歌的表現を、対句構造に配置した事例が現れる。いわゆる「西宮紅梅の歌の序」と呼ばれる歌の序に、初めてそれを認めることができる。それが、源順にとって、和歌的表現を、漢詩の対句表現的に配置する<sup>2</sup>という意識への芽生えだったと考えられた（安部（2022）参照）。

◆「西宮紅梅の歌の序」の対句的表現を抽出して和歌的配置に組み直したもの（【】部は便宜的補充）

A この小木の生ひ出でて【髪も】白浪の知らぬ身なれど いかゞ背かむ

B 万代の老木になるまで大淀の仰せ言をば いかゞ背かむ

本稿では、それらに関わる源順の歌の事例を追加することを主な目的とする。併せて、その技法が本歌取りの歴史でも、『新古今和歌集』以前のいわゆる「プレ本歌取り」期とも呼ばれることがある初期の本歌取りの形成時期とも関わっているということも、指摘する（注1）。

## 2 「歌の序」における和歌的対句表現

上述の「西宮紅梅の歌の序」の中では、A・Bそれぞれの上の句、下の句に相当する部分は、実際の歌の序の中ではまだ連続して配置されてはならず、それぞれ別の位置に対句的に配置されている段階であった。それが、ほぼ五七五七七の韻数の連続した表現となり、しかも、内容的にも対句的關係にある2首相当として連続して表現されるようになるのは、数年後の、いわゆる「松声入夜琴の歌の序」に確認することができる（安部（2022）参照）。

◆「松声入夜琴の歌の序」の「対の歌」

A 遣り水に 浮かべる菊に 思ひ合はすれば 和泉ばかりに 沈む我が身【そ】

B 衣笠岡 照るもみぢ葉を 見わたせば 円居に侍る さへまばゆけれ

対称的文法構造Ⅱ場所―自動詞―植物―自動詞―条件節「ば」―場所「に」―述語（自分の身分への思い）

これらの歌の序の成立年代から見て、源順におけるこのような対称的構成をなす対句的和歌というものの発想の源は、漢詩の詩序における対句表現にあったものと推察された。

源順の「対句的和歌」は、一見した表現上の形式からは、「本歌取り」とも近似し、また、所謂「贈答歌」における答歌とも近似している。また、「引歌」との関係とも似てくる面もある。しかし、前稿で示した事例からわかるように（事例は後掲参照）、贈答関係ではないから所謂贈答歌の範疇ではない。また、本歌取りの技法とも、引歌の関係とも異なる（これらとの相違は、また別の機会に改めて取り上げたい）。それらとは異なる特異な形式であり、そのような点を考慮すると、改めてその和歌の詠歌様式の位置づけを、丁寧に行っておく必要がある。

源順には、そのような「対句的和歌」ではない、ごく普通とも言える贈答歌もあれば、初期の本歌取りとも見えるような歌も詠んでいる。また引歌を指摘される歌も見られる。そのような、一定の類似性や近似性をもつ歌も多く残している。典型的な「対句的和歌」とそれらとの相違を明らかにするためにも、広い意味で、類似関係や影響関係がみられる順の歌を広く見ておく必要がある。

そこで本稿では、順の対句的構成法を持つ歌を追加するだけでなく、先行研究によって影響関係・類似関係が指摘

されている順の歌も広く提示し、それらの特徴を確認してみることにする。

なお、上記のような本歌取り、贈答歌（の答歌）などのほかに、10世紀半ばの「百首歌」等の初期定数歌群における「返し」の形式との近似性もあることが、故・近藤みゆき氏の指摘から明らかになった。近藤（2004）での考察を見る限りでは、「返し」と似ている側面はあるものの、「返し」の技法とも大きく異なっていることがわかる。そうなると、やはり源順のこの詠歌形式は、どのように定義され、どのような営みであったのかを検討することが一層重要になってくる。近藤氏の「返し」の技法との比較は、別の機会に改めることとし、その比較のため、源順の「対句的和歌」と類似する歌をまずは例示していくことにしたい。

さて、順も属するいわゆる「河原院文化圏の歌人」達が歌の範と仰ぐ紀貫之の和歌に、後に研究上、本歌取りのごく早い時期の事例として取り上げられる歌があることにも目を向けておく必要がある。

### 3 紀貫之の『万葉集』の「本歌取り」

「本歌取り」の歴史を確認していくと、その最も古い事例のひとつとして挙げられることが多い歌に、紀貫之の次の歌があげられている。

○紀貫之「三輪山を | しかも隠すか | 春霞 | 人に知られぬ | 花や咲くらむ」『古今和歌集』巻2-94  
 ○額田王「三輪山を | しかも隠すか | 雲 | だにも | 心あらなも | かくさふべしや」『万葉集』巻1-18

初句・二句は額田王の歌と全く同一である。第3句以降が自作ではあるものの、3句の縁語「霞―雲」、4句目の縁語的語「人―心」、4句と結句での類義語的表現「知られぬ―かくさふ」など、縁語や類義語が、同一句ないし近

い句に配置されていて、構成的にも極めて近似していることがわかる。それゆえ、「本歌」に「付き」過ぎていく特徴が、時に問題ともなり、『新古今和歌集』以降のいわゆる「本歌取り」確立より前の、時に「ブレ本歌取り」などとも呼ばれる時期の傾向のひとつともされる。

「順百首」の和歌に、「貫之集」の和歌と対称的構成を成す本歌取り的歌（後掲する「みぞぎする」）が認められる。それは、順も含まれるいわゆる河原院文化圏の歌人達が紀貫之を歌の範と仰いでいたことも関わっていると考えられた。特に、右の貫之の歌のように初句・二句が全く同一ないしほぼ一致する点は、後掲していくように、源順の「対の和歌」における、初句と（ないし）二句とにおいて同一表現を使う事例が多い傾向とも一致し注目される。

河原院歌人達が範と仰ぐ貫之が、このように、本歌取りという以上に類似度の高い詠作をしているならば、漢詩の「対句」的技法を取り入れた順が、その対となる和歌との間で、より類似度の高い対称的構成を採用するのは、むしろ自然な流れともいえよう。順の「対の和歌」に、類似度の高い歌が多いという特徴は、詩序の対句の模倣というだけなく、この紀貫之の詠作形式が、もう一つの源流になっている可能性がある。

本歌取りは、後に歌論書などを経て、「置き所を変えないで用いる場合には二句以下とする」「主題を合致させない」など、むしろ両歌の距離を置く一定の制限を確立させていく。しかし、その前の初期の段階においては、順のような、むしろ同一句が多く、主題も一致し、文法的構造や全体の構成までも近似させるような、対句の援用の意識がまだ強い詠法が展開していたのではないか。紀貫之とのこのような類似は、改めて注意していく必要があるろう。

#### 4 源順の「対句的和歌」——安部（2022）より

源順の「対句的和歌」の事例について、その後見出した歌を挙げる前に、比較参照するために、安部（2022）において指摘した上記以外の対の歌を再掲しておく。

##### ◆『貫之集』

○ 別涼

A みそぎする 河 の 瀬見れば から衣 日もゆふぐれに 浪ぞたちける（『貫之集』延喜二年屏風歌・9）

○ B みそぎする 加茂 の 川波 たつ日より まつのかげ（異・かぜ）こそ かく見えけれ（順百首）、夏・498）

対称的文法構造Ⅱ「みそぎする」——二句の頭韻「か」——河川表現——類語「瀬」「波」——動詞「見る」「立つ」の交錯——「日」——縁語（「夕暮れ」「影」）——係助詞（ぞ・こそ）——動詞——助動詞「けり」

初句（冠部）は「みそぎするか」まで六音同韻で、末尾もほぼ同韻の「ける／けれ」であり、文法構造だけでなく二句の「の」も含め冠・沓部の韻も意識されているとみられる。

次は『古今和歌集』の歌との対称性を示す歌の例である。同様に一致語句や縁語を傍線他で示しておく。

##### ◆『古今和歌集』

(ア) ○ A 春きざると 人はいへども 鶯の 鳴かぬ限は あらじとぞ思ふ（『古今和歌集』11、壬生忠岑）

○B冬きぬと 人はいへども 朝水 結ばぬ程は あらじとぞ思ふ (『源百首』514)

\*冠部「・・きぬとひとはいへども」→「ぬ・・は」→沓部「はあらじとぞおもふ」

(イ) ○A宿近く 梅の花植ゑじ あじきなく 待つ人の香に 誤またれけり (『古今和歌集』34)

○B宿近く 桜は植ゑじ 心うし 咲くとはすれど 散りぬかつく (『源百首』537)

(ウ) ○A時しもあれ 秋やは人の 別るべき あるを見るだに 恋しきものを (『古今和歌集』839、壬生忠岑)

○B時しもあれ 小鹿の橋を 秋行けば 我妻さへぞ 恋渡るべき (『源順集』269)

## 5 『古今和歌集』との類似歌

前稿・安部(2022)では、『古今和歌集』の和歌と、構成的にも類似する源順の和歌3首(『順百首』中の五一四、五三七、「源順集」一六九)を取り上げ(上記4節の和歌)、その対称的構造を具体的に解説した。それら3組以外にも構成の類似が同程度に認められる歌としてさらに3首(『源順集』一六五、一八〇、一八六)の歌番号と初句のみを、前稿の【補注1】に挙げておいた。後者の3首について、ここでは、その構成の類似を改めて示すために、対応する源順の歌と併記しておくことにする。いずれも後者が『古今和歌集』で、対応する語・句がわかりやすいように空白を入れ、同語・縁語・類義語等に傍線を付す。

「本歌取り」的技法の結果その類似度が高じたというよりも、意図的に語句や文法構造等の構成そのものの対称性

を、いわば対句表現にも近いかたちで接近させている様子がうかがえる。

〇二六五 千鳥なく さほの川霧 さほ山の もみぢばかりは 立ちなかくしそ 『源順集』

三六一 千鳥なく さほの川霧 立ちぬらし 山のこの葉も 色まさりゆく 『古今和歌集』

〇一八〇 風さむみ 鳴く かりがねに あはすれば よるの衣は うちまさりけり 『源順集』

二一一 夜をさむみ 衣 かりがね 鳴くなへに 萩のしたばも うつろひにけり 『古今和歌集』

〇一八六 春ふかみ 井手の 川浪 立ちかへり 見てこそゆかめ 山吹の花 『源順集』

一二五 かはづなく 井手の 山吹 ちりにけり 花のさかりに 会はましものを 『古今和歌集』

さらにこれら6首以外にも、近似性・対称性は多少劣るものの、さらに次の対を指摘することができる。

〇八 ほのぼのと明石の 浜を見わたせば 春の浪わけ 出づる舟のほ 『源順集』

四〇九 ほのぼのと明石の 浦の朝霧に 島がくれ行く 舟をしぞ思ふ 『古今和歌集』

〇二二 きふこそゆきてみぬほどいつのまに うつろひぬらん のべの秋はぎ 『源順集』

一七二 きふこそゆきてみぬほどいつのまに いなば そよぎて 秋風の吹く 『古今和歌集』



○四〇 思おもひをも恋こをもせじのみそぎすと ひとかたなでて はてはてはしお 『源順集』

五〇一 恋こせじとみたらし河かにせしみそぎ 神かみはうけずぞ なりにけらしも 『古今和歌集』

○四七 せぐら山やまおぼつかなくもあひぬるか なくしかばかり 恋こしきものを 『源順集』

四三九 をぐら山やまみねたちならしくしかの へにけむ秋あきを する人ひとぞなき 『古今和歌集』

○二八〇 山吹やまぶきの花はなのした水みづさかねども みなくちなしと かげぞみえける 『源順集』

一〇二二 山吹やまぶきの花はな色いろ衣いぬしやたれ とへどこたへず くちなしにして 『古今和歌集』

○五五八 思おもふともおもはずといひてあぢきなく ひとをうらむることのわりなき 「順百首」

一〇三九 思おもへどもおもはずとのみいふなれば いなやおもはじ思おもふかひなし 『古今和歌集』

これらを見ると、前稿であげたものを含め、特に上の句（特に初句・二句）に同語ないし類似する句や表現が現れている傾向が顕著である。いわゆる本歌取りを試みてたまたま類似性が高い和歌となった、というよりも強い意図性を読みとれよう。意識的に同じ句や語を一定の句に配置している、と考えることができる。

今回の追加で合計12首になり、文法的構造が瓜二つという歌から、複数の句に同語が現れる程度という和歌まで、類似度には幅がある。原田真理（1979）では『古今和歌集』の影響を受けた類似する源順の和歌として10首という数

をあげる。原田氏は、10首という数字と一部の例示ゆえ、どの10首かは具体的には未詳である。上記の12首ほどは類似歌と考えておくことができよう。

改めてこれらの特徴を整理してみると、以下のような傾向を認めうる。

○初句・二句での一致ないし近似、中でも特に初句での一致度が高い。

○結句（五句）にも、同じ語形を置く傾向が強く、時に結句の末尾で同音ないし類音となる語形を置く傾向も認められる。

○上の句の終わりに同じ語形や音、ないし、類似する語形や音を置いたり、同じ位置の句の中に（三句なら三句に）同語や類義語、類音語を置く傾向も認められる。

○総じて、類義語、縁語の使用もあるが、音の上で同じ韻を踏んでいるかのように配置させるなど、韻やリズムにも意を用いている様子を読み取ることができる。

これらの傾向は、いわゆる「贈答歌」（の答歌）や、「引歌」、「本歌取り」の特徴を踏襲したというよりも、やはり順にとつての詠歌形式の源である「歌の序」における対句表現がその遡源にあるため、と考えられる。単なる本歌取り的詠法が極まった偶然の結果ではなく、源順の意識的な独自の詠歌様式であることを把握していくためには、さらに多くの類似和歌を収集し検討する必要がある。

## 6 源順の「対句的和歌」と類似する詠作——恵慶、和泉式部——

### 6-1 「恵慶百首」での対句的和歌

5節まで見てきた源順の詠歌様式に類似した和歌は、ひとり源順のみにとどまったのではなく、周囲の河原院文化圏の関係者にも影響していったことがうかがえる。前稿にては、恵慶の次の歌を指摘した。

◆「源順集」と「恵慶百首」

○ <b>る</b> せきより	もる <b>水</b> の <b>音</b> の	きこえぬは	冬 <b>来</b> に <b>け</b> れば	こほりすらしも	(源順集、杵冠歌―冬・五四八)
○ <b>あ</b> で河の	けふ <b>波</b> 音の	きこえぬは	冬 <b>の</b> は <b>じ</b> めと	こほりすらしも	(恵慶百首・杵冠歌―冬・二八一)

杵を付けた部分を見ていくとわかるように、初句での頭韻がそろい、結句の七音（脚韻）はまったく同じである。いわば冠部と杵部とが一致している。そのほか、二句の「おとの」、三句五音、四句の最初の「ふゆ」、というように一致する位置もまったく対称性をなしている（右図で□の杵で示した部分）。その他、種々の傍線部のように相互に関連する縁語、類義語が極めて多いのも特色である。全体として、音の位置の一致を意識して詠作されていることがわかる。

6-2 『和泉式部日記』における式部5首と師の宮の5首

いわゆる河原院文化圏の歌人との交流が指摘されている和泉式部にも、それをうかがわせる贈答歌がある。『和泉式部日記』に見られる和泉と師宮との贈答歌とされているものである。

それぞれ五首連作で記されているが、いま対比させるために1組ずつ併記して示す。初句（ないし初句と二句）だけでなく、下の句のいずれかの同じような位置に対称的語句（同語、類語、縁語など）が、詠みこまれていることを

確認できる（4・5組目のみ下の句には該当語句は見られない）。

- 1 (和泉) 秋のうちに朽ち<sup>レ</sup>はてぬべきことわりの時雨に袖を誰にからまし  
(師宮) 秋のうちは朽ち<sup>レ</sup>けるものを人もさはわが袖とのみ思ひけるかな
- 2 (和泉) 消えぬべき露のわが身はもののみぞあゆく草葉に悲しかりける  
(師宮) 消えぬべき露の命と思はずは久しき菊にかかりやはせぬ
- 3 (和泉) まどろまであはれいく日か（「いく夜」日記）になりぬらんだ雁がねを聞くわざにして  
(師宮) まどろまで雲居の雁のねを聞くは心づからのわざにぞありける
- 4 (和泉) われならぬ人もさぞ見ん長月の有明の月にしかじあはれは  
(師宮) われならぬ人も有明の空をのみ同じ心にながめけるかな
- 5 (和泉) よそにても同じ心に有明の月を見るやと誰に問はまし  
(師宮) よそにても君ばかりこそ月見めと 思ひてゆきし今朝ぞ悔しき

この贈答の成立についてはいろいろと解釈されているように単純ではない。『和泉式部日記』に従えば、女の側から連作の五首の歌をよみこんだ「手習のやう」な手紙を宮にやり、宮は連作の歌五首だけで返した、ということになっている。

増田繁夫（1986:60）「贈答歌のからくり」によれば以下のように解釈されている。少し長くなるが引用しておく。

○「家集では返歌の方は一首も見えないことから判るように、贈答歌として見る時には、答歌は贈歌の初句に一

一首一首対応させて形式を整えてはいるが、それ以下の句の内容でも贈歌に真正面から応じ、つき過ぎていて、変化や飛躍の意外性に乏しく、贈歌と対等に立つ独自の存在感を欠くのである。この日記に見える宮の歌には、和泉自身がよんだものが多いのではないかといった説もあるが、少なくともこの答歌の一群の対応の仕方平凡さは、宮のものであろうと思う。」

傍線部のように、「贈答歌」というには、これらの答歌が贈歌に「つき過ぎていて」、同じ表現を踏襲し過ぎていることの違和感を指摘されている。当時の贈答歌の形式を踏まえて詠んだもの、ではなく、むしろ何かの（源順のような）詠歌様式を意識して詠まれた歌、ととらえなおすと、この形式は理解しやすいように思われる。仮に、そのように解釈してみる時、上記に続けて増田氏が次のように【答歌は】「五首全体としての構成までは考えられていない」とまで述べていることは、それはこれらが「贈答歌」だという前提での解釈であることがわかる。むしろ、贈答歌の様式を必ずしも踏まえていない点を注目すべきなのではないか。源順の「対句的和歌」のような初句・二句（さらに下の句や結句、そして途中の対称的な位置への類似語句）の配置を踏襲した、贈答歌とは別の詠歌様式が意識されていたことを、この連作は示してはいはしないだろうか。

○「この例は五首もの贈答なので、各歌のつき過ぎているところが目立つということもあるが、一般に贈答歌には、答歌は贈歌をうけてそこから出発しても、やはり一首の和歌形式として独立したものであるから、贈歌につきあう重みをもった独自の存在ででもなければ、贈答歌としての姿が整わず、歌よりは贈答という行為の方に重点が移ってしまうのである。【中略】

前記の和泉と師宮の贈答は、五首づつということ、二首一組の場合よりも構成的に対応するのが困難なところがあるかも知れない。しかしこれは、初句を共有することから判るように、基本的な二首一組の対応には注意され

ているが、五首全体としての構成までは考えられていないのである。」

「二首一組の対応」を詠みこむことが、むしろ、この連作での和泉式部自身の試みだったのではないか、とも思われてくる。もしそうであるならば、そのことは、家集には返歌の方がいないこと、和泉自身が詠んだという説があることも関わってくるように思われる。

## 7 「順百首」における類似表現の多い歌（福田智子（2011）を踏まえ）

5・6節までは安部（2022）以降、見出してきたものである（安部（2024a, c）も参照）。5節で指摘したような、元歌の初句・二句を踏襲するという類似点を踏まえると、源順は、対句表現の和歌への応用というだけではなく、額田王の歌を踏襲した紀貫之の詠歌様式を特に意識していた可能性もある。貫之同様に、初句・二句をそのまま詠む歌が特に顕著であった。

このような源順の詠歌様式の特徴に関連して、福田智子（2011）が、「順百首」と先行歌集・歌合との間に認められる類似する和歌を多く指摘していることを見出した。

○福田智子（2011）「順百首」の表現撰取——先行歌集・歌合との関わりと『古今和歌六帖』——」  
類似するかどうかの解釈には、個々人での差異があるうが、福田氏の指摘するものを見てみると、確かに元歌と類似性の高い歌が多いものの、それらの多くは上記の傾向や形式とは必ずしも一致しない（福田氏が挙げる歌でも、前稿や安部（2024b, c）および上述の6節までに挙げた歌はいま除外する）。例えば、一例例示すると次のようなものである。

○ (これはあさかやまになはつ)

さはだ **がはせぜのむもれ木あらはれて** はなさきにけりはるのしるしに

「順百首」(『好忠集』五三五)

(題しらず)

よみ人しらず)

名とり **がはせぜのむもれ木あらはれば** 如何にせむとかあひ見そめけむ

『古今集』卷第十三、六五〇

初句は後半の一部「かは」のみの一致で、同語句は二句・三句目になっており、それ以外での語の対応や意味的対応は薄い。

その一方で、福田氏があげる類似歌の中には、本論で見えてきたような元歌に対して対称性がより強い歌も、やはりいくつか見られる。福田(2011)の中からそれらを列記しておく。なお、細い傍線は福田氏が類似語句として示した部分で、そのまま残した(右の2首も同様)。それを含め、対称的な詠歌形式にあたると思われる箇所は、他の線や強調(二重線や太字や枠)にて区別して安部が追記した。順のこの詠歌形式を認識することで、さらに注目すべき語句が新たに現えてくるのがわかる。(○印にて類似歌群ごとに示した。\*は安部の注記である。)

○ **かく恋ひむものと知りせば** ゆふへ置きてあしたはけぬる露なら **ましを**

『万葉集』卷第十二、三〇三八

**かく恋ひんものと知りせば** ひとめ見る人にこころをつくる身なれば

〈順百首〉『好忠集』五六二

源順の対句的対称的構成の和歌(対の歌)の広がり(安部)

源順の対句的対称的構成の和歌（対の歌）の広がり（安部）

（ゆみ）

人丸

かく恋ひんものと知りせばあづさゆみすゑのなかごろあひみてましを

『古今和歌六帖』第五、三四二五

\* 右のこの『古今和歌六帖』にも初句・二句および結句の末尾の語句（脚部の韻）をそろえる詠法は見出せる。

○ ひだりこぞのみこひて、ことしのこころなして、まく

左勝

貫之

はるがすみたちしかくせばやまざくら

『亭子院歌合』九

たつみ

かすみたつみむろのやまにさくはなはひとしれずこそちりぬべらなれ

〈順百首〉『好忠集』五七八

○ 右

ひとたびも恋しとおもふにくるしきは心ぞちぢにくたくべらなる

（これはあさかやまになにはつ）『これは浅香山に難波津』

ひとたびもわりなくものをおもふには胸もちぢにぞくだくべらなる

〈順百首〉『好忠集』五五五

『寛平御時后宮歌合』一五七（寛平元年〜寛平五年九月二十五日）（889〜893年）

最初に挙げた歌群の『古今和歌六帖』では「人丸」作とあるが、その根拠は未詳のようである。作者が後代の可能性ももしあるならば、初句・二句のみならず末尾「ましを」まで、『万葉集』と一致させる構成は、上記のような珍



しい語句の継承性という点も含め、結句末の音（韻）を合わせる傾向もつ源順の詠歌特徴に通じている。『古今和歌六帖』の編者として源順をあげる説（平井卓郎（1954））があることを考える時、このような共通性は注目してよかった。

福田智子（2011）「順百首」の表現撰取」が指摘する『古今和歌六帖』へのつながりは、長歌の場合にも認めることができる。『篁』での一首は、「源順集」の長歌の後半部（の五七七）と対称的対の歌の関係を成している。長歌の一部分からも、対をなす歌を詠作している事例は、いまだ源順の事例しか見出せていない。

以上のように、指摘した源順に見られる特異な詠歌様式に注目してみると、従来の類似歌、贈答歌、あるいはまた本歌取り、引き歌等の視点から見ることとは、異なる新たな和歌の分析を可能にしてくれるものである。敢えて「対句的和歌」として取りあげている由縁である。

## 8 本稿のむすびとして

本稿では、源順に特徴的に認められた詠歌技法として、元歌に対して対称的構成をなす対句的和歌（「対の歌」）の様式を改めて取り上げ、その事例として検討すべき歌を追加して考察してみた。

現時点では、源順の対称的構成の歌「対の歌」のパターンは次のようにまとめられる（安部（2024a）参照）。

\* 源順の「対の歌」のパターン

- 1 語句の対称的類似＝語句の一致が強いパターン（初句・二句、そして時に結句の一部も）

源順の対句的対称的構成の和歌（「対の歌」）の広がり（安部）



○源順の「西宮」の歌の序

○源順の紀貫之の和歌の本歌取りの和歌

○「順百首」の成立時期（九六〇年頃）

○「源順集」の中の対句的和歌の成立時期

今回、贈答歌における「答歌」との相違という点では、増田繁夫（1986:09）「贈答歌のからくり」を参考にそれを基準とすれば、順の対句的和歌は、贈答歌（答歌）とはやや異なる範疇としてとらえておく方が有効であると考えられた。いわゆる「本歌取り」や「引歌」の範疇とは異なる傾向も確認できたと思われる。

さらに検討すべき点は、いわゆる「初期定数歌」（「初期百首歌」と呼ばれる歌群における「返し」にも見出せる、類似した元歌への「付け方」、元歌の引き方との比較である。「初期定数歌」の「返し」の特徴については、つとに故・近藤みゆき（2004）に詳しい検討と定義的考察を見出すことが出来たが、それらとも異なっていることを確認できる。その点については、別稿にて取り上げていくこととしたい。

注1 源順集「順百首」ほか和歌資料からの引用は、先行研究からの引用部分では原則先行研究の原文のままとした（ごく一部、一致する語句の表記を敢えてそろえた場合もある）。その他では、原則として、『国歌大観』『私家集大成』によることとし、また「日本Web図書館」の「和歌&俳諧ライブラリー」によって検索した本文（底本）を参考とした場合がある。例えば、「源順集」は書陵部本「歌仙集」を、「順百首」部分は伝二条為氏筆本（天理図書館蔵）「好忠集」を参考とした。なお、本稿の目的が歌の語句・表現の一致や類似を示すことにあるので、特にそのような部分では便宜的に適宜表記（漢字表記・仮名表記、仮名遣い等）を改めた場合が少なくないことをご了解いただければ幸いである。

【補注】なお、本稿（安部 2024b）は、安部（2024a, c）とは相前後して順次執筆し、参考文献にも記載のように、各々で小山順子

源順の対句的対称的構成の和歌（対の歌）の広がり（安部）

五二

(2023) の本歌取り論および松本真奈美 (2005) 初期「百歌首」比較、福田智子 (2011) での類似歌指摘、増田繁夫 (1986) の贈答歌論などを対象として論じたが、説明の必要上、事例の多くが重複していることをご了承いただければ幸いです。  
「類歌」の問題については勝又隆氏（学習院大学教授）からご教授いただいた。深謝申し上げます。

【付記】本稿は次の研究費による研究成果の一部でもある。日本学術振興会科学研究費2017-2019年度基盤研究（C）（基金）、課題番号：17K02785、代表：安部

### 【参考文献】

- 福本巖次 (1936) 「曾丹集の一考察―用語上より源順集と関聯して―」『国語国文』6-4  
池田龜鑑 (1947) 「曾禰好忠についての疑問と新資料」『中古國文學叢考』3  
藤岡忠美 (1951) 「後撰時代歌人群の展望（上）」『日本文学史研究』9  
平井卓郎 (1954) 『古今和歌六帖の研究』第二章 古今和歌六帖の編者とその成立年代」明治書院  
西山秀人 (1955) 「後撰集時代の屏風歌―貫之歌風の継承と新表現の開拓―」『屏風歌と歌合』風間書房  
藤岡忠美 (1958) 「毎月集の日記性について」『日本文学』7-7  
川口久雄 (1959) 「源順の作品とその特質」『平安朝日本漢文学史の研究』中 明治書院  
藤岡忠美 (1961) 「曾禰好忠の文体についての序論」『国語国文研究』18・19  
中野幸一 (1967) 「うつほ物語の和歌と引歌―源順作者説の再検討―」『学術研究』16  
原田真理 (1979) 「源順和歌考」『平安文学研究』62  
北村杏子 (1981) 「初期百首の形成とその性格」『平安文学研究』65  
北村杏子 (1981) 「曾丹集中の「三百六十首」の特質について」『国語と国文学』58-8  
小谷博泰 (1985) 「曾根好忠集および源順集の用語に関して―『源順作百首』の作者は好忠である―」『国文 研究と教育』8  
増田繁夫 (1986) 「贈答歌のからくり」『和歌文学の世界第十集 論集 和歌とレトリック』笠間書院  
原田真理 (1987) 「源順と和歌―源順集を手がかりとして―」『香椎潟』33  
近藤みゆき (1990) 「平安中期河原院文化圏に関する一考察―曾你好忠・惠慶・源道済の漢詩文受容を中心に―」『千葉大学教養部

- 近藤みゆき (1992) 「見渡せば」と「眺望」詩—拾遺集時代の漢詩文受容に関する一問題として— 『古今集と漢文学』汲古書院
- 近藤みゆき (1996) 「和歌の展開——一〇世紀」『9・10世紀の文学』(岩波講座 日本文学史第2巻) 岩波書店
- 西山秀人 (1997) 「源順歌と延喜式祝詞——祝詞の和歌受容について——」 『上田女子短期大学紀要』20
- 西山秀人 (1998) 「源順歌の表現——古今和歌六帖——」 『和歌文学研究』76
- 近藤みゆき (1998) 「古今和歌六帖の歌語——データベース化によって見た歌語の位相——」 『歌ことばの歴史』笠間書院
- 渦巻恵 (2000) 「河原院文化圏と『堀河百首』」 『学校法人佐藤栄学園埼玉短期大学研究紀要』9
- 西山秀人 (2001) 「源順の屏風歌——その歌風の変遷について——」 『学海』17
- 西山秀人 (2002) 「古今和歌六帖」の出典未詳歌——その表現特性をめぐって—— 『古代中世文学論考 第7巻』新典社
- 渦巻恵 (2002) 「河原院文化圏と『堀河百首』——補遺——」 『学校法人佐藤栄学園埼玉短期大学研究紀要』11
- 渦巻恵 (2002) 「河原院文化圏と『堀河百首』——追考——」 『平安朝文学表現の位相』新典社
- 丹羽博之 (2003) 「好忠百首」と『漢詩百首』 『古代中世和歌文学の研究』和泉書院
- 藤岡忠美 (2003) 「後編 第二章 四、曾禰好忠の特異性について」 『平安朝和歌 読解と試論』風間書房
- 近藤みゆき (2004) 「古今風の継承と革新——初期定数歌論——」 『古今和歌集の伝統と評価』風間書房
- 松本真奈美 (2005) 「惠慶百首について——好忠百首・順百首との関連——」 『尚絅学院大学紀要』51
- 福田智子 (2011) 「順百首」の表現撰取——先行歌集・歌合との関わりと『古今和歌六帖』—— 『文化情報』6-1
- 田中智子 (2015) 「源順の大饗屏風歌——古今和歌六帖の成立に関連して——」 『國語と國文學』92-2
- 小山順子 (2015) 「本歌取り成立前史・平成二十六年第一回日本文学研究専攻特別講義」 『特別講座』第29号
- 小山順子 (2023) 「後撰集」時代の〈本歌取り〉について 『国文論藻』22

●安部清哉論文

- 安部清哉 (2017) 「原『篁物語』の作者・成立年と源順および河原院歌壇沈淪歌人群の長歌・和歌——九六一年から九八〇年頃か——」 『学習院大学文学部研究年報』63

源順の対句的対称的構成の和歌（対の歌）の広がり（安部）

源順の対句の対称的構成の和歌（対の歌）の広がり（安部）

五四

安部清哉（2018）『伊勢物語』三十九・四十・四十一段と源順——『篁物語』第Ⅰ部・第Ⅱ部共通の二典拠章段として——『人文』16

安部清哉（2022）「源順における漢から和——探韻から探字・押韻の和歌そして歌の序の対句から対称的和歌へ——」『人文』20

安部清哉（2023）「平安朝物語の複層構造による長編化への胎動」『人文』21

安部清哉（2024a）「源順の対句の対称的な詠歌様式（対の歌）——併せて『宇津保物語』『篁物語』の類似構造の四首比較」

『人文』23（小山順子（2023）の本歌取り論、松本真奈美（2006）初期「百首歌」比較を踏まえて）

安部清哉（2024b）「源順の対句の対称的構成の和歌（対の歌）の広がり」『文学部研究年報』26（福田智子（2011）での類似歌

指摘を踏まえ）（本稿）

安部清哉（2024c）「贈答歌と源順の対称的構成の歌との相違」『学習院大学大学院日本語日本文学』20（増田繁夫（1986）の贈答

歌論を踏まえ）